

伊方行政訴訟を支援する会

矛盾を深める原発ゴリ押し作戦

全国各地の住民の抵抗のために、昭和48年度中には、一基も原発設置の申請が出ずじまいでした。業を煮やした電力業界と政府は、「エネルギー危機に便乗して何が悪い」と高言して、巻き返しに出てきています。各電力会社は、今年度中に合計13基(1,102万キロワット)の原発の着工申請を電源開発調整審議会(電調審)に出す予定を発表しました。その中には、四国電力の伊方二号炉という、あつかましい計画も含まれています。このような動きに答えるように、政府も、原子力委員会から「稲葉私案」という怪しげな形で、原子力開発の“見直し案”を出させました。その中で、「火力は減らすが、原子力については、昭和60年に6000万キロワットにするという現在の計画が、最も望ましい成長の姿である」と、性根もなく、勝手な数字をかかげ、「エネルギー危機」を真に受けている素朴な国民に、原発反対斗争が“住民エゴ”であることを印象づけようとしています。また、地方自治体丸ごとの買収作戦を可能にする電源立地関係の法案を国会に提出し、さらに、「これまで反対が強かったのは、原発の安全性に問題があったのではなく、安全の宣伝が足らなかったため」との、全くお間違いない情勢分析に基いて、PR用予算をはずむと、いった至れりつくせりの応援ぶりを示しています。一方、自民党議員約130名からなる原発

関係議員連盟が、参議院選を前にして発足し、政経不離の体制づくりにも力を入れています。

しかし、皮肉なことには、こうして電力や政府が力めば力むほど、つぎつぎとボロが出てきています。もっとも象徴的なのは、原子力開発の大元締め原子力委員会で起った騒動、田島英三原子力委員の辞任でしょう。田島立教大教授は、環境放射能に関する有能な専門家で、現在の原子力委員会の中では、唯一人のまともな人物と見られていました。就任後二年にもなりません、日頃から、行政の無責任な安全宣伝に困惑しているという噂も流れていました。森山科学技術庁長官が独断的に、宮島龍興氏を委員に任命したこと、抗議するという形で、責任を果せないとして辞任したのです。宮島氏は基礎物理学者で、原子力の安全性については全くの素人ですが、政府が力を入れている筑波大学の学者グループの代表として、自民党筋から強力な推せんを受け就任した人物です。「安全より宣伝」との政府の方針の具体化は、第一歩でつまづいたといえるでしょう。

一方、肝心の稼働中の原発では、“実証炉”の看板は、ますます色あせてきています。欠陥炉の悪名高い美浜1号原発は、さる2月から半年ごとの定期検査に入っていましたが、例の蒸気発生器細管で、またまた、減肉が発見されました。これまでの、電力や政府の説

明では、細管の曲り部分がやられるのであり、その可能性のあるところは盲栓をしたから、もう減肉はしないということになっていたのです。つまり、予想外のところで腐蝕が見つかったのですから、さぞ驚いたことでしょう。「減肉は4本だけ」と発表し、またぞろ運転を再開しそうな気配ですが、福井県が、蒸気発生器全体のとりかえを勧告したという事実は、事態の深刻さを示しています。

伊方原発行政訴訟の国側の準備書面(一)では、わざわざ、美浜と伊方の蒸気用細管の見とり図を示して、伊方のは美浜のと構造が違いうから腐蝕を起さないということを印象づけてようとしています。これに対し原告側から、「伊方では腐蝕しないといえるのか」と釈明請求を提出してあります。きたる6月6日の第3回公判で、どんな答弁が出てくるか、たのしみです。

一方、美浜2号炉での燃料棒の曲りについても、電力と行政は、「たとえ燃料棒が曲ってお互にくっついていても安全であり、念のためとりかえたから全く心配ない」ということで、さる1月末に強引に運転を再開しました。しかし、3月の参議院予算委員会の席上で、辻議員の追及により、つぎのような事実が判明しました。運転中の原発の安全性について実質的に責任を負っている通産省原子力技術顧問会は、3回も会議を開いて議論したのですが、とうとう、「曲っても大丈夫」という関西電力の主張を認めることができず、「行政上の配慮」から、曲った燃料棒をともかくとりかえて運転を許そうとの通産省の意向を承認したということです。電力危機のさ中で、原発を長期間停止することを避けたいという「配慮」が、「安全」に優先したのです。連

中は、うまく住民をごまかしたつもりでしょうが、「安全」に対する自信のなさをさらけ出したことに気付いていないのです。こんなことでは、美浜はもちろん、他の原発でも、燃料棒事故は起り続けることはまちがいありません。面子にこだわって、欠陥だらけの“実証炉”を運転し続けることは、住民の安全をますます脅かすことになり許せないことですが、強行すればするほど、各地の住民にとっては、貴重な“反面教師”の役割を果たすことになるでしょう。

最近になって明るみに出ました、大阪の労働者岩佐さんの放射線被ばく問題も、彼我ともに大きなショックを与えています。電力や行政は、「これまで原発での被ばく事故はない」との宣伝の化けの皮がはげることと恐れ、「あれは反対派の作りごとだ」とか「ゆすり行為だ」とか、ヒステリックに叫んでいます。一方、原発に反対する住民の間では、やがては自分たちにも訪れるかもしれない、原発の汚染場所で働かされる臨時雇いの労働者の姿を示すものとして、大きな関心をよんでいます。何しろ3年も前のできごとですから、立証作業などに困難も予想されますが、岩佐さんは、伊方行政訴訟に参加しておられる弁護士の方を代理人として、日本原子力発電会社の放射線管理のずさんさを告発し、救済措置を勝ちとるまで闘い抜く決意を固めておられます。岩佐さんの闘いが進めば進むほど、同種の被害者への波及も必至となるでしょう。

各地の反対運動もますます腰をすえた闘いを展開しています。札束と権力とカラ宣伝とに頼り、住民の意志を無視したゴリ押し作戦は、ますます矛盾を深め、その当然の運命をたどることでしょう。(Q)

伊 方 の 人 々

この一連を伊方に斗う人々に捧ぐ

関 久 子

伊方の海遠く澄みつつこの岸に原子力発電所の工事進めり
松の影波に浸せる海静か見等も泳がむ魚も寄り来むに
南に海見ゆる道の山阻に紅梅咲きて美しき里
岬山の道いく曲り冬日射す櫓の照り葉みかんの照り葉
みかん實に冬暖かき半島を今ぞ砕くとアルドーザールはる
山畑に老いしをば上を働かせ焚火用材集めにひねもす君は（忙しい中現地に案内して下さった大沢氏に感謝す）
坐り込みや里道斗争の戦術を鋭くは云はぬ会議にあひぬ
凍々と我胸にひびきくるよ静かなりゆるがざり戦いの討議
四斗伎をかつがば更に五斗伎と戦ふ君の云葉力あり
炉心部に爆弾投げむ刑事責任問ひし翁の面さりげなし
三崎伊方保内輪番の坐りにて今日は伊方九丁六人のお母さんたち
何に代へても孫子に害は残さじと屋の坐りは母たちがする
早朝にひと仕事すませ坐りこむ母たちの輪はどっしりとして
老人と我をいたはる若人ら火を焚き茶を汲み語るさまざま

伊方現斗に四年経し君しみじみと能勢の戦ひをたづねくれたり
一夜さを共に坐りし君ただかひの何れのところにか又逢はむといふ
三時には出漁するといふ若者が更くるに去らず網仕事は疲れむに
秀でたる眉毛の下に輝ける腫瘍しき君何も云はさりしかど
煩まろき十八才の青年よ眠からむわが胸に倚りたまへ
立てるあり腰せるあり手をかざし焚火を囲む青春群像
焚火にもかからぬ程の雪舞ひて寒さはおそふわが後より
雪ちらちら大寒の夜の午前二時我の堪ゆるはたゞ一夜のみ
雪片ををりをり散らす夜の雲のおさまりゆきて凍るあさあけ
坐り込みのしらじら明けに黙々と道を掃き水を打つ愛媛大生君は
夜どほしを語りあかして何云ひし覚えすただ懐し君ら
松山に別れのお茶を汲みし君今はいつこに戦ひてゐむ
京大生君と夜船を共にして暁のわかれのさわやかなりし

一九七四・一・二七

（大阪啄木の会誌「あしあと」

第四十二号より一部省略して転載）

——この文は、詩でも短歌でもなく、
思い付いたままに書いたものです。今年
かぞえの六十二才で、忙しい百姓で学も
何も有りません。電力のやり方に腹立ち
まぎれに書いたものでございます。——

(関久子氏への手紙から)

大沢 イ サ ラ

昭和四十六年八月

一、原発道路のバベの木に
首をつられた長松は(舐)
新聞テレビにのせられて
行く先地獄の針の山

二、山本長松鬼かじやか
人のいやがる原子力
公開原則守らずて
事故の責任誰が持つ

舐誰かに作られた山本長松
伊方町長のわら人形

昭和四十七年

思い返せば早三年
原発反対叫びつつ
きせい事実は造れども
あくまで団結くずすまじ
いざ戦わん最後まで

昭和四十八年

一、原発地点の周辺は
みかんだいだい甘夏柑
安全審査の人々も
まさかめくらちやあるまじに

許可を下げた角さんも
一度現地に来て欲しい

二、おいしい空気に青い海
魚の宝庫の瀬戸内海
危険な原発追い払い
きれいな魚を食べましょう

三、せまい九丁に住みながら
賛成反対云わずして
四電の犠牲にならぬよう
みんなでわが前守りぬき
昔の九丁にもどしましょう

会計報告('74,4/7~5/7)

収入

会費	146,150
カンパ	31,500
返金	4,200
前月より繰越	201,622
計	383,472

支出

ニュース代	6,000
原告、弁護団会議補助	13,000
資料費	12,000
郵送費	2,910
為替手数料	1,580
会場費	4,000
事務用品費	7,400
計	46,890

繰越金

336,582